

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 瀧口 知彌
学位 博士(歯学)
学位記番号 新大院博(歯)第315号
学位授与の日付 平成27年3月23日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
博士論文名 Oral health and depression in older Japanese people
(日本の高齢者における口腔健康状態とうつ)

論文審査委員 主査 教授 葭原 明弘
副査 教授 吉江 弘正
副査 教授 宮崎 秀夫

博士論文の要旨

【背景および目的】高齢者では加齢とともにうつ傾向になりやすい。また、うつ傾向が口腔健康状態に様々な悪影響を及ぼすことはよく知られている。しかし、先行研究では対象者の年齢を調整したものは少なく、また75歳以上での高齢者を対象にしたものは極めて少ない。本調査の目的は日本人の地域在住高齢者における口腔衛生状態とうつ症状の関連を評価することである。

【対象および方法】地域在住の77歳の高齢者351名(男性:189名,女性:162名)を対象とした。口腔内診査は現在歯数,齲蝕の有無,プロービングデプス,アタッチメントレベルを評価し,加えて,ワッテ法による安静時唾液量,ガム法による刺激唾液量を測定した。

うつ症状の指標にはGHQ30を用いた。GHQ30日本語版のマニュアルに従い7点以上のものをGHQ30の高スコア群とした。

全身の状態については質問紙を用い主観的な身体の痛みについての情報を得た。また,薬識手帳による服薬の確認を行った。ADLの指標として老研式活動能力指標を採用した。二分位を求め,その値をカットオフ値として高スコア群,低スコア群と定義した。

分析としてGHQ30のスコアと口腔症状,全身の状態でクロス集計を行った。口腔症状とうつ症状との関連を評価するためロジスティック回帰分析を実施した。GHQ30のスコアを従属変数とした。独立変数の選定にあたっては口腔症状のうち有意であった項目を採用し,低安静時唾液量,低刺激唾液量を採用した。交絡要因として性別,現在歯数,『身体に不自由な点がある』と解答したもの,老研式活動能力指標の低スコア群を採用した。

【結果および考察】クロス集計では安静時唾液量の少ないもの,刺激唾液量の少ないもの,『口が渇く』,『口の中に痛みがある』,『言葉がうまく発音できない』,『身体に不自由な点がある』とそれぞれ解答したもの,および老研式活動能力指標の低スコア群がGHQ30の高スコア群に関連があった。ロジスティック回帰分析を行った結果,女性(オッズ比[OR]=2.3,信頼区間[CI]:1.3-4.1),安静時唾液量の少ないもの(OR=2.1,CI:1.2-3.9),『口の中に痛みがある』と回答したもの(OR=2.4,CI:0.5-3.8),『身体に不自由な点がある』と解答したもの(OR=2.1,CI:1.2-4.0),老研式活動能力指標の低スコア群(OR=2.0,CI:1.1-3.5)が高GHQ30スコアに対して有意($p<0.05$)なオッズ比を示した。

本調査では地域在住の高齢者において唾液量の減少と『口が渇く』『口の中に痛みがある』という自覚症状はうつ症状と関連があることが明らかになった。

過去の調査においても主観的な口腔乾燥感,安静時唾液量と刺激唾液量は経年的なストレスと関連があることが示されている。唾液量の減少は様々な口腔機能を低下させ,QOLの低下につながるということが知られている。

また,痛みとうつには関連があることが知られている。過去の調査では口腔の痛みはADL,ストレス,並びにQOLに影響を与えることが分かっており,本調査でも同様の結果を得ることができた。

また、高齢者では原因不明の疼痛とうつ症状は関連があることが知られている。そのような場合においては精神医学的なアプローチが必要になり、歯科医学的なアプローチ以外の様々な分野との連携が必要である。

結論として、本研究では、地域在住の日本人高齢者において主観的および客観的な口腔乾燥、特に安静時における唾液量の低下と口腔内の疼痛の訴えはうつ症状と関連があることが示された。

審査結果の要旨

本調査は日本人の地域在住高齢者における口腔衛生状態とうつ症状との関連を評価することを目的としている。

地域在住の77歳の高齢者351名（男性：189名，女性：162名）を対象とした。口腔内診査は現在歯数，齲蝕の有無，プロービングポケットデプス，クリニカルアタッチメントレベルを評価し，加えて，ワッテ法による安静時唾液量，ガム法による刺激唾液量を測定した。うつ症状の指標にはGHQ30を用いた。GHQ30日本語版のマニュアルに従い7点以上のものをGHQ30の高スコア群とした。全身の状態については質問紙を用い主観的な身体の痛みについての情報を得た。また，薬識手帳による服薬の確認を行った。ADLの指標として老研式活動能力指標を採用した。

クロス集計では，安静時唾液量の少ないもの，刺激唾液量の少ないもの，『口が渇く』，『口の中に痛みがある』，『言葉がうまく発音できない』，『身体に不自由な点がある』とそれぞれ回答したもの，および老研式活動能力指標の低スコア群がGHQ30の高スコア群と関連があった。ロジスティック回帰分析を行った結果，女性（オッズ比 [OR] = 2.3，信頼区間[CI]: 1.3 - 4.1），安静時唾液量の少ないもの（OR = 2.1，CI: 1.2 - 3.9），『口の中に痛みがある』と回答したもの（OR = 2.4，CI: 0.5 - 3.8），『身体に不自由な点がある』と回答したもの（OR = 2.1，CI: 1.2 - 4.0），老研式活動能力指標の低スコア群（OR = 2.0，CI: 1.1 - 3.5）が高GHQ30スコアに対して有意（ $p < 0.05$ ）なオッズ比を示した。本研究では，地域在住の日本人高齢者において主観的および客観的な口腔乾燥，特に安静時における唾液量の低下と口腔内の疼痛の訴えはうつ症状と関連があることが示された。

本調査では，高齢期におけるうつ症状と口腔内の症状との関連を評価している。従来よりうつ症状をもつ高齢者の増加が課題となっているが，口腔内症状との関係については不明な点が多かった。得られた果は，今後のうつ症状を有する高齢者対策において，口腔疾患にも注目すべきであることの根拠を示している。それは今後の地域歯科保健に大きく寄与するものであり，学位論文としての価値を認める。